様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２４日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520659
研究課題名（和文）　日清戦争時、日本軍の朝鮮甲午農民軍討滅作戦に関する研究

研究課題名（英文）　Research on the Japanese military operation for suppressing the Donghak Peasant Revolution in the First Sino・Japanese war

研究代表者
井上　勝生（INOUE KATSUO）
北海道大学・名誉教授
研究者番号：90044726

研究成果の概要（和文）：日本軍の討伐大隊長文書と戦死兵の石碑碑文、討伐軍兵士個人の従軍日誌複数などを見出した。朝鮮農民ら東学農民軍の抗日蜂起は、従来は注目されなかった中央部山岳地帯で一斉に始まった。この時に、広島の大本営こそが、農民軍主力ほか全部を包囲殲滅する作戦を立案し、派兵した。作戦の後半では、日本軍指導部から殲滅命令が続発されており、朝鮮農民軍数万人以上の厖大な死者を出した。この事実関係を解明・実証した。

研究成果の概要（英文）：One of the results of this reseaech project is the discovery of historical documentes written by a battalion commandar of the Japanese punitive force, the stele inscriptions for battale casualties, and soldiers'war diaries.These documents provide evidences for analysis of the following incidents.When the Donghak Peasant Revolution began in Korean central mountainous area,which has not been recognized in previous studies,the Hirosima imperial headquarters planned a military operation to surround and suppress the main body of the Donghak Peasant Army and dispatched troops. At the final stage of their battles,the imperial headquarters made a rash of orders to annihilate them,which led to the loss of more than ten thousands of peasants'lives in total

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：日本近代史，日清戦争

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者は、先に平成 18 年度～19 年度の科研費・基盤研究（C）「甲午農民戦争と鎮圧日本軍に関する基礎的研究」において、防衛研究所図書館や四国各県の県立文書館などで、日本軍の作戦関係文書を探索し、韓国の東学農民戦争研究者たちと交流しつ

つ、東学農民軍殲滅作戦の基礎史料を探索し、朝鮮半島中央部の三路を南下して東学農民軍を包囲して殲滅する作戦の大枠を明らかにしてきた。しかしなお作戦全体の一層具体的で多面的な解明が、課題とされていた。

（２）東学農民軍に対する「三路包囲殲滅作戦」の立案に、広島の大本営が係わっていることは、大本営の電信記録などから推測されるが、立案過程そのものは、まだ未解明であった。

（３）東学農民戦争と日清戦争全体との関係について、広島大本営やソウル日本公使館、現地司令部の役割などを踏まえて解明する必要が生まれていた。

（４）先の研究の終了直前に、山口県で、討伐専門部隊大隊長が軍用行李に入れていた東学農民軍討伐史料を見出すことができた。この討伐作戦の重要史料の解明も課題であった。

２．研究の目的

（１）日本軍の東学農民軍を討伐する作戦は、これまで明らかにされたように、ソウルから、三つの街道に分かれて朝鮮半島西南部地域へと南下して、農民軍を包囲・殲滅する作戦であった。一方、東学農民軍の蜂起と日本軍との戦闘は、これまで、東学農民軍の主力部隊がいた朝鮮半島西南部の全羅道地域以外のところについては、無視されがちであった。しかし、日本軍の記録からは、全羅道地域以外の、たとえば朝鮮半島中央部山岳地帯の東学農民軍の蜂起も大きな比重を持っていたことなどが推測された。これらを具体的に実証し、東学農民軍の抗日蜂起全体の展開を再構成する必要があった。

（２）三路を南下して包囲・殲滅する作戦の立案が、広島大本営とソウル日本公使館、朝鮮現地司令部のあいだの、どこで、どのようにしてなされたかについて、解明する必要があった。

（３）日本から派兵された討伐専門大隊は、日本軍のライフル銃と農民軍の竹槍・火縄銃の戦力差が圧倒的で、一人の戦死者しか出していなかった。研究代表者は、この戦死者の記録を、『徳島日日新聞』で見出してもいた。ところが、参謀本部が編纂した『靖国神社忠魂史』では、この戦死者は、場所も時期も異なる、成歓の戦闘の戦死者に改変されていた。東学農民軍に対する日本軍の包囲殲滅作戦は、今も研究者にも知られていない。こうした戦争の記憶の消滅を解明する必要があった。

（４）日本軍討伐専門部隊大隊長は、山口県出身で、幕末期に長州藩有志諸隊に参加していた。その総督が井上馨であった。日清戦争時には、井上馨は、ソウル駐在日本公使として、討伐作戦に深く係わり、討伐大隊長と作戦前後に面会している。また、広島の大本営の中心人物が幕末長州藩で井上馨とともに活動した総理大臣の伊藤博文であった。幕末以来の関係がソウル駐在日本公使、討滅専門大隊長、総理大臣のあいだに存在した。これらの長年の関係と東学農民軍の殲滅作戦実行との関連の有無にも注目する必要があった。

３．研究の方法

（１）防衛省防衛研究所の部隊司令部の陣中日誌や、大隊長の作戦実施報告書、韓国側の東学農民戦争研究などから、三路包囲殲滅作戦の具体的な展開を詳しく再検証し、第二次東学農民戦争の全体像を再構成した。

（２）防衛研究所が保存する大本営の日誌などの電信記録類、また朝鮮現地の日本軍司令部や各部隊の陣中日誌などから、東学農民軍の動静、鎮圧作戦などを再現し、東学農民軍に対する三路包囲殲滅作戦が、どこで、どのようにして、立案されたのかを解明した。

（３）討伐専門部隊が出軍した四国四県の地方新聞に掲載されている兵士の書翰などから討伐作戦の状況と討伐部隊の実像を再構成した。

（４）討伐専門部隊は、圧倒的な戦力差によって、一人の戦死者を出しただけであった。この戦死を報ずる『徳島日日新聞』記事を見出した。一方参謀本部が編纂した『靖国神社忠魂史』では、戦死は、場所も時期もまったく違う成歓の戦いと改変されていた。徳島県阿波郡一帯をフィールドワークし、墓を探索し、事実関係を調査した。

４．研究成果

（１）研究代表者が山口県で見出し、山口県文書館へ寄贈された南小四郎大隊長文書の検討を進めた。討滅作戦報告「東学党征討略記」などを分析し、日本軍の討滅作戦、東学農民側の抗日蜂起、第二次東学農民戦争の実状を新たに解明できた。日本軍は、ソウル方面から、三路を南下して鎮圧を展開したのであり、大隊長が進んだ第３中隊の中路の作戦が正確に分かった。東学農民軍の主力は、ソウルを目ざして北上し、その結果、忠清南道公州市が攻防戦の中心となり、第一次と第二

次の公州戦闘の激戦が戦われた。これが、第二次東学農民戦争（日本軍および日本軍に指揮された朝鮮政府軍と東学農民軍の戦争）の山場になった。大隊長の中路日本軍は、公州戦闘に参加するために西へと移動する。ところが東側、後方の忠清北道山岳地帯の東学農民軍も期を同じくして蜂起した。そのため大隊長の中隊は反転し、山岳地帯の奥へ入って、公州戦闘に参戦できなかった。見なおすと、西路軍も、同様に各所で抗日蜂起に出会い、小隊ごとに分断されていた。ライフル銃の日本軍と竹槍の東学農民軍は、戦力差が圧倒的で、虐殺に等しい戦況であったが、こうして東学農民軍は、討伐日本軍全軍に激しく抵抗できたのであった。東学農民軍の蜂起は、これまで主力となった西南部平野地帯の東学農民軍の蜂起にだけ重点を置いて叙述されてきた。しかし、朝鮮半島の大部分の地域に及ぶ広範囲な、組織的な、地の利を得た農民軍蜂起として抗日戦争を再構成する必要のあることを解明した。

（２）日本軍の鎮圧作戦、三路包囲殲滅作戦が、日本軍指導部でどのように立案されたかを解明した。立案の前提になったのは、以前の研究が想定していた西南部平野地帯の東学農民軍主力の蜂起ではなく、それに先んじた、評価の低かった忠清北道山岳地帯東学農民軍の、日本軍兵站線に対する一斉蜂起であった。それに直面したソウル駐在日本公使と日本軍現地司令部が大本営に派兵を要請した。これを受けた広島大本営は、大本営で独自に農民軍全体に対する三路包囲殲滅作戦を立案した。三中隊を派兵し、三路を南下して、東学農民軍全体を包囲殲滅することとした。大本営と日本政府の外交部は、西欧列強の軍事介入を警戒して、東学農民軍が、ソウルに接近したり、ロシア国境へ逃走することを早期に防止しようとしたのである。立案された包囲殲滅作戦は、現地の日本公使館と仁川兵站司令部へ伝えられ、実行された。このように東学農民軍に対する包囲殲滅作戦は、現地部隊の作戦ではなく、大本営の作戦であったこと、こうして交戦国ではなかった朝鮮の農民軍を徹底的に殲滅し、厖大な犠牲者を出させたことを明らかにした。

（３）軍事力としては格段に劣勢な東学農民軍は、数の厖大さと地の利を得た組織力で日本軍に対抗し、それでも圧倒的な格差のある軍事力によって徹底的に包囲殲滅された。しかし、東学農民軍の抗日蜂起は、これまで言われているよりも、はるかに根強く持続した。研究代表者は、徳島県阿波郡を踏査し、討滅専門大隊が出したただ一人の日本兵戦死者の忠魂碑を見出した。そして、碑文と南小四郎大隊長文書、防衛研究所の記録などによって、公州戦闘の後の、忠清南道連山県での戦闘状況を復元した。韓国でも、東学農民戦争の研究者が、研究代表者と連絡をとりつつ、連山戦闘跡地を現地調査した。その結果、連山戦闘でも、日本軍が拠点とした官衙や、東学農民組織の拠点となった村、官洞里など、戦場の遺跡地が今も残っており、東学農民軍は、なお二万という大軍を動員して日本軍に抗戦しつつ退却したことを解明できた。この連山戦闘の現地調査には、その後、研究代表者も韓国現地へ赴いて参加し、今も韓国側の研究者たちによって現地調査が続けられている。これまで、東学農民軍は、公州戦闘での敗北以後、敗走の一途をたどったように叙述されてきた。しかし、今あらためて、朝鮮半島南端地域、最終段階の長興戦闘、康津戦闘などまでの、軍事的にははるかに劣勢だった東学農民軍が持続した「長い抗戦」に注目する必要がある。日本軍は、殲滅に一ヶ月を予定していたが、現実の東学農民軍の抗戦は三ヶ月余に及んだ。

（４）日清戦争当時の地方新聞の記事を手掛かりに、（３）で述べたように、徳島県阿波郡で、日本軍討滅大隊のただ一人の戦死者の忠魂碑を探索し見出した。忠魂碑には、東学農民軍との連山戦闘で戦死したと明記されていた。防衛研究所の陣中日誌、当時の地方新聞もそのように報道していた。この戦死地とその日時は、事実であった。ところが、『靖国神社忠魂史』は、この兵士の戦死を、中国軍との成歓の戦いでの戦死と、戦死場所も、期日も、大きく改変しいた。参謀本部が編纂した『靖国神社忠魂史』による改竄から、日本軍の東学農民軍鎮圧作戦が、戦史などに記されなかった事情をうかがうことができることを指摘した。調査したように、東学農民軍討伐専門大隊は、四国四県出身の兵士で編成された。しかし、地元の四国でも、東学農民軍殲滅の戦争の記憶が、今日においてもなお消されたままであることを指摘した。

（５）本研究の最終段階、今年３月に、高知県宿毛市と徳島県吉野川市において、民家の蔵に所蔵されていた討伐軍兵士個人の「陣中日誌」を、地元の方の助力によって見出すことができた。一つは、日本軍兵站線を守備する守備大隊の兵士で、朝鮮半島東南部の日本軍兵站線に対して蜂起する東学農民軍討伐戦の模様が記されている。もう一つは、東学農民軍討伐のために派兵された討伐専門大隊兵士のもので、朝鮮農民軍討伐戦争の実状が詳しく記されている。討伐戦争の展開を堅固に実証する史料であり、これまで知られていなかった実情も記述されている。研究代表者は、この東学農民軍討伐戦争をテーマとして、科学研究費がさらに３年間、新たに認め

られている。地方の蔵に所蔵されてきた陣中日誌には、兵士の手紙など周辺史料の残存の可能性もあり、討伐日本軍兵士の視点も加えて、研究をすすめることが可能になってきた。東学農民軍討滅戦争を確実にに実証するとともに、社会史的に検証する手掛かりも得ることができた。

（６）韓国の学会や大学、研究所などで招待されて講演を行うことができた。国内でも、討伐部隊が編成された県の一つである、高知市の自由民権記念館の研究会で、市民の参加を得て、講演することができた。その機会に（５）で述べた、地元の記録が蔵にあるという情報を市民の方から得て、詳細に戦況を知ることができる史料を見出した。その分析は、これからの課題である。今年、７月末には、討伐専門部隊が編成された松山市で、地元研究団体や地元大学教官などの主催で、研究代表者等日本の研究者、また韓国の専門研究者が共同のシンポジウムを開く準備が進んでいる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①井上勝生、幕末・維新変革とアジア、　比較史的に見た近世日本（東京堂出　版）、査読有、2011、204-236、
http://www.tokyodoshuppan.com/
②井上勝生、東学農民戦争と日本政府、『日本、韓国併合を語る』（開かれた　本社（ソウル）、査読無、2011、73-1　03、
③井上勝生、戦時下、時代に棹さした北大生宮澤弘幸・再論、北海道大学大学文書館年報、査読有、６号、2011、71-81、
http://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/
④井上勝生、明治維新とアジア、和田　春樹他編『岩波講座　東アジア近現　代史　第１巻』岩波書店、査読有、2　010、218-2　37、
http://www.iwanami.co.jp/
⑤井上勝生、後備歩兵第一九大隊南小　四郎文書－日清戦争から、国立歴史　民俗博物館編『「韓国併合」100 年を　問う』岩波書店、査読有、2010、351　-357、
http://www.iwanami.co.jp/
⑥井上勝生、朝鮮東学農民軍を殲滅し　た日本軍、歴史地理教育、査読有、7　61 号、2010、66-71、
http://www.jca.apc.org/rekkyo/
⑦井上勝生、第二次東学農民戦争と弾　圧日本軍（ハングル）、東北アジア歴　史財団編『韓中日の戦争遺跡と東北　アジアの平和』東北アジア歴史財団、　査読有、2010、163-262、
⑧井上勝生、東学農民軍包囲殲滅作戦　と日本政府・大本営、思想、査読有、　1029 号、2010、26-44、
http://www.iwanami.co.jp/
⑨井上勝生、札幌農学校植民学と有島　武郎－『星座』と千歳川アイヌのコ　スモス、北海道大学大学文書館年報、査読有、4 号、2009、1-19、
http://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/

〔学会発表〕（計５件）
①井上勝生、東学農民戦争と日本政府・　軍部、東学農民革命記念館研究会主　催、招待講演、開催地東学農民革命記念館、韓国井邑市、2011 年 12 月 8 日
②井上勝生、甲午農民軍討滅戦と四国　の大隊、高知近代史研究会主催、招　待講演、2011 年 9 月 17 日、高知市・市　立自由民権記念館
③井上勝生、東学農民軍を鎮圧した日　本軍の歴史史料、朝鮮史研究会他主　催、開催地国立博物館、韓国ソウル市、招待講演、2010 年 10 月 22 日、
④井上勝生、東学農民軍討滅日本軍を　探求して、忠北大学校史学会主催、2009 年 4 月 15 日、開催地、忠北大学校、韓国清州市、
⑤井上勝生、忠清道東学農民軍と弾圧　日本軍、忠清北道報恩郡文化院主催、2009 年 4 月 17 日、報恩郡文化院、韓国忠清北道報恩郡

６．研究組織

(1)研究代表者
井上　勝生（INOUE KATSUO）
北海道大学・名誉教授
研究者番号：90044726

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし